

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No. 73

JULY 2013



「島根県 松江城」

特集

こんな本に出会った

都城工業高等専門学校
Miyakonojo National College of Technology

電子書籍時代にこそ図書館の活用を

校 長 桑 原 裕 史 1

「書く」ということ (I) 図 書 館 長 望 月 高 明 2

特集

こんな本に出会った

私の愛読書	一般科目 (理科) 竹 若 喜 恵 4
読書と発想	一般科目 (理科) 本 田 淳 史 5
本の贈り物	一般科目 (文科) 福 田 佳奈子 6
私の読書体験	技術支援センター 安 友 政 登 7

教員交流を終えて ～鹿児島高専での一年間～

機 械 工 学 科 高 橋 明 宏 8

新入生オリエンテーション開催される 10

図書委員長と副委員長になったの抱負

委 員 長 榎 田 宗 丈 (4 年電気情報工学科) ... 11

副委員長 山 中 康 成 (4 年機械工学科) 11

平成25年度図書委員 11

図書館からのお知らせ 11

夏季休業期間中の長期貸出について

夏季休業期間中の開館について

平成25年度図書館カレンダー 12

編集後記 12

●表紙「島根県 松江城」

島根県松江市の宍道湖北畔にそびえ立つ松江城。松江開府の祖・堀尾吉晴が、慶長12(1607)年から5年の歳月をかけて築城した。

山陰で唯一現存する天守閣は、国の重要文化財に指定されている。千鳥が羽根を広げたように見える入母屋破風(いりもやはふ)の屋根が見事なことから、別名「千鳥城」とも呼ばれている。

黒塗りの下見板で覆われた天守閣は、黒と白のコントラストが美しく、桃山初期の城郭の特徴を見事に残している。360度の視界が広がる最上階の望楼からは、松江の町並みが一望できる。

撮影 図書館長 (一般科目) 望月 高明



電子書籍時代にこそ図書館の活用を

校 長 桑 原 裕 史

今世紀に入りインターネット回線の高速化やネット上の情報の充実、さらにその端末としてのタブレットやスマートフォン等の急速な普及によって、日常生活や仕事上での情報収集は、先ずはインターネットということになってしまった。このことは、若者言葉で「ネットでググる」と言うそうであるが、この言葉も目まぐるしい日常の変化の中で既に死語になっているかもしれない。本校の学生諸君も「勉学上の調べものは図書館で」と言う勉強方法から、「先ずはインターネットでググり、レポートはコピペ」と言う書籍に頼らない勉強方法？に陥っているのではないだろうか。

今、書籍の文化も電子書籍の登場により新たなステップを踏み出すことになった。当初から印刷されることを考慮しない書籍の出現や、一般の書籍から電子的に読めるように加工する「自炊」が可能となり、紙ベースの書籍の売れ行きも下降モードである。

さらに、ネット上には様々な芸術作品も存在し、マルチメディアも駆使した新しい手法による作品の発表の場としても、その地位を築きつつある。

図書館も世の中の情報媒体の進展に合わせ、従来扱っていた書籍だけでなく、CDやDVDを収蔵するようになった経緯もあるが、今後、ネット上に溢れる情報をより効率的・効果的且つ合法的に扱えるように変遷していくのだろう。

皆さんは「青空文庫」と言うものをご存知でしょうか？これは、著作権違反にならない範囲でインターネット上に文学作品を公開している電子図書館のシステムであり、現在12,000点余りの作品をパソコンやスマートフォンを使って手軽に無料で読むことができる。本校の「図書館だより」でも推薦された夏目漱石、芥川龍之介、小林多喜二等による有名な著作も収録されている。例を示せば、スマホで「青空文庫」をググり、作家別インデックスで「芥川龍之介」を選択すれば、彼のたくさんの作品のダウンロード画面となる。名著に触れる機会として、若い学生諸君にとっては手軽な手段と考えられる。

思わず、従来型図書館不用説を論じているようになってしまったが、そうではない。

書籍の文化は、文書の内容自身が重要なことは言うまでもないが、文字の大きさ、活字の種類、挿絵とその位置、装幀、紙の質等、文字以外の必要で有用な多くの情報も含み、実際の使用感も含めて、電子媒体では必ずしも代替できない。また、初学者にとっては、書籍のページを一枚一枚めくり、必要な事項を書き写すという手間が知識の定着には大そう有効であるそうだ。このような訳で、学生諸君には是非図書館に足繁く通っていただき従来型の勉強手法で知識の定着を図ってもらいたいと考えるところである。

さて、図書館長より推薦図書を挙げるように依頼を受けているので、紹介しておきたい。

先ずは、前述の青空文庫でも可読な芥川龍之介の作品、これには短編もあるので取りつきやすい。もう一つ、エッセイを紹介したい。土屋賢二著「われ笑うゆえにわれあり」本格的な哲学者である作者のユーモアエッセイである。あなたも禁煙をやめられる、なににも考えないで楽しく生きる方法、汝みずからを笑えなど、身の回りの出来事を哲学的に考察したかのように書かれたものである。多少くどいところも有るが、思わず吹き出してしまうエッセイで電車の中で読むのは控えたほうが良いと思う。しかし、あくまでも哲学者の文章なので説得力もあり、学生諸君が報告書を書くにもきっと参考になるであろう。



「書く」ということ（I）

図書館長 望 月 高 明

一

小文の表題を「『書く』ということ」としたが、私が物を書くことに非凡な能力を有していて、事実そういう労作があるとか、あるいは文章作法に一家言を有していてその道に精通しているとかいうことではない。もしそういうことであれば、私は一言半句も論ずることなどできない。ただ、平生自分の研究成果を論文という形で表現することに努めていること、また、非常勤で出講している看護学校で、その名も「日本語表現法」という講義を担当していて、書くことは常に私の関心の埒内にある。それに私は本校の国語科の教員でもある。もっとも、今あげた私が研究論文を書いていること、「日本語表現法」を講義していること、あるいは国語科の教員であることなどは、なるほど直接的・間接的には私を「書く」ということに関心を向けさせるけれど、それが物を書くということが容易になったということを直ちに結果するものではない。むしろ、率直に言えば私にとって物を書くという行為は、恐ろしく骨の折れる困難なことである。そういうわけで、「『書く』ということ」という表題で何か述べようとすると、私の場合は自己の現実を反映して、必然的に「……することができない」という否定的な言辞を絆わざるを得ないことになる。であるから、小文の表題を見て「書く」ことについて何かこつとか、秘訣とかが書いてあると期待したならば、残念ながら早とちりも甚だしいといわなければならない。むしろ、そういうこつとか秘訣とかがあったら、是非ともご教示願いたいものである。

私は「書く」ということを考える場合、常に反射的に小林秀雄（1902～1983）の文の一節を想起する。小林秀雄といっても、本校の学生はほとんど具体的なイメージを抱くことができないのではないだろうか。あるいは今年の大学入試センター試験の現代文には、久しぶりに同氏の随筆から出題されて世間やマスコミを賑わせたから、記憶に止どめている人もいるかも知れない。受験界・マスコミを賑わせたといったが、今年のセンター試験の国語の平均点は101.04点（200点

満点）と過去最低を記録したという。そして、その主たる要因として指摘されているのが、同氏の「^{つば}鐔」という作品であるらしい。私が高校生であった頃は、小林秀雄の文は国語の教科書に常時採用されていたこと、また大学入試問題（当時は各大学が独自に入学試験を実施しており、まだ統一試験は行われていなかった）では毎年どこかの大学で出題していたこともあって、最もポピュラーな名前であった。小林秀雄の文に親しんだ経験のある者ならばすぐ分かるのだが、高校生の間ではその名前は独特の難解な文章をもって喧伝されて、一種の畏敬の念をもって語られる伝説の人であった。だから、私が大学に進学した当時は、小林秀雄に深く傾倒して熱く語っている友人も見られた。私の蔵書の中に『小林秀雄全集』全十三巻があるのは、若い頃のそういう知的雰囲気を表している。

小林秀雄について色々述べてきたが、ともあれ、私が常に「書く」ことを考える際に想起する文をあげるとしよう。それは彼の畢生の大著『本居宣長』の冒頭の一節である。

本居宣長について、書いてみたいという考へは、久しい以前から抱いてゐた。（中略）やはり、宣長といふ謎めいた人が、私の心の中にて、これを廻つて、分析しにくい感情が動揺してゐるやうだ。物を書くといふ経験を、いくら重ねてみても、決して物を書く仕事は易しくはならない。私が、こゝで試みるのは、相も変わらず、やつてみなくては成功するかしないか見当のつき兼ねる企てである。（傍点望月）
畢生の大著といったが、氏の『本居宣長』は雑誌『新潮』に十年以上にわたって連載されたものである。それがようやく単行本として刊行された時（昭和52年）には、世の読書子に強く支持され好意をもって歓迎された。私もそういう風潮に刺激を受けて一応は読んでみようとしたのだが、本居宣長の著作に親しんでいないことも手伝って、敢えなく途中で放り出してしまった。（江戸時代の思想に関心を持つようになり、ぽつぽつ論文を発表するようになって、徳川時代における宣長の史的地位の重要性に気づくようになって、『本居宣長全集』23巻を架蔵するに至ったが、依然として宣長に

ついて故吾であることに変わりはない)。それにもか
かわらず、冒頭の一節だけは今でも鮮明に覚えている
のは、よほど私の心塊に应えるものがあつたからに違
いない。殊に上掲の傍点を附した2文などは、今こう
して改めて読んでみても、物を書くという行為がいかに
困難を伴った力業であるかを、まざまざと思い知ら
される。安易に他の職業に就かず、己が文筆だけで生
計を立てているプロの評論家、しかもわが国において
「評論」というジャンルを一人立ちさせるのに最も与
かって力のあつた小林秀雄にして「物を書くといふ経
験を、いくら重ねてみても、決して物を書く仕事は易
しくはならない」、「私が、こゝで試みるのは、相も変
らず、やつてみなくては成功するかしらないか見当のつ
き兼ねる企てである」という言葉が存するのだ。であ
るから、私のような才もなく学も浅い誠に取るに足り
ない人間が、物を書くことが恐ろしく骨の折れる困難
なことであると思うことなど、むしろ当たり前のこと
ではないか。物を書くという行為は、脳裏を揺曳する
漠とした想念、流動的で右するか左するか分明でない
ものに明確な輪郭を与えることであるから、それが困
難を伴わぬはずがないではないか。もし書くことにお
いてそういう要素を些かも含まないとしたならば、そ
のような文は到底読むに値しないものであるに違いな
い。当時の私が上の小林秀雄の言葉をどのように受け
止めたかは分からないけれど、今の私だったらこのよ
うに断言することができる。

二

幕末の陽明学者吉村秋陽(1797～1866)といっても、
現在ではその名前を知る人はほとんど稀である。彼は
幕末昌平^{こう}の教官にして学界の泰斗と仰がれた佐藤一
斎の学風を最も忠実に伝えて、その心性の学を深めた
学者である。しかし、ここでは秋陽の学について論じ
ようというのではない。ここで注目したいのは、彼が
すぐれた文章家でもあるという点である。秋陽は既に
若くして文才があり、江戸遊学の途次京都に頼山陽
(1780～1832)を訪ねたが、山陽はその文才を惜しん
で門下に留めようとしたというエピソードがある。次
の文は秋陽が講友の池田草庵(1813～1878)に宛て
た書簡であるが、その中で文章作法上の苦心とともに
注目すべき文章論を述べている。なお、この場合の「文

章」とは、漢文＝中国の文語文による書き言葉である
ことは固よりである。

御端書に拙文御推奨被下、意外之義愧入申候。少壮
之時は至極好み候事故、余程苦しみ、欧陽子の三多
之説を確守、寢食を忘候程に専心致志^し候得共、遂に
如意に出来不申。夫に付文章は天分人力並に有之候
事ならでは、十分に成不申様に相考申候。世にも文
章を善し^{よく}候人、皆天分は随分有之候ても兎角人力不
足の人多様相覚へ、大典師杯は先両方完具と可申
か乎。近時流行の浮薄虚蕩之文は乱道之巧言、不足言
候得共、やはり天分勝にて人力は届兼候乎。拙より
己の事を申も何如敷候共、人力は可なりに居候ても、
一向天分無之故、巧拙之工合は粗^は相心得候ても、下
筆の際不如意。夫故是迄自己大体得意と申様なる文
は絶而出来不申候。(『^纂陽明学者書簡集』、吉村秋
陽書簡)

因みに私は看護学校で「日本語表現法」を開講する際
は、必ずこの秋陽の文を提示するのを常としているが、
もちろん学生たちの読書力では全く歯が立たない。(小
文の読者が忍耐強く読み通すことを期待する)。欧陽
子は、北宋の文学者・思想家・史学者・政治家の欧陽
脩(1007～1072)のこと。なお、極端に学問の細分
化の進んだ現代には、陽脩のように1人で文学・思想・
史学・政治などの様々なジャンルを兼ね備えた人物は、
ほとんど見出すことができない。宋学(その中核に位
置するのが朱子学)を担った主体は士大夫であるが、
その特徴は知識階級である点に、換言すれば儒教經典
の教養の保持者たる点にあった。その限りにおいて、
その知的関心は甚だ広汎であった。「三多之説」とは、
文章作法上不可欠な三条件のこと。彼の文にこう言う、
「文を作るに三多あり。看多、做多、商量多なり」と。
すなわち、陽脩は文章作法上の条件として、「看多」(多
く読む)、「做多」(文を多く作る)、「商量多」(多く思
索する)の三つをあげている。なお、陽脩は散文では
整った明晰な文章を書き、古文の1つの模範となった。
そして、秋陽はこの陽脩の「三多説」を墨守して、寢
食を忘れるほどに文章作りに没頭したことを告白して
いる。曩に秋陽が名文家だと言ったが、彼の著書はそ
の一部が明治になってその養嗣子吉村斐山によって上
梓された。しかし、その多くは写本のまま伝えられて
おり、容易に見るを得ない。また、そのほとんどは漢
文で書かれているため、現在のわれわれはその文を理
解するための読書力を、そもそも欠いている。

私の愛読書

一般科目（理科） 竹 若 喜 恵

北九州高専から人事交流で参りました、竹若です。専門は数学です。2年生から4年生の授業を担当しています。よろしくおねがいします。

高校で文理分けのときに理系を選択し、理学部数学科へ進学しましたが、小中学校でお世話になった先生方は、それを知ったときたいそう驚いていらっしゃいました。文学部に進んで文学者になるんじゃないかと思われていたようなのです。

確かに、私は小学生のころからクラスの劇の脚本を書いたり、短編小説を生徒会誌に投稿したり、文学少女を気取っているところがありました。きっかけは、小学校1年生と2年生で担任していただいた先生方が、読書感想文にたくさん〇をつけてくださったことではないかと思っています。おかげで、もっと本を読みたいという気持ちと、作文が得意なのだという根拠のない自信が大きくなっていったと思うのです。

さて、こんな私が、ずいぶん長い間、何度でも読んでいる本があります。大石真著「教室二〇五（ニイマルゴ）号」です。オイルショックのちょっと前くらいの時代、関東らしきある町を舞台に、小学生の友一と洋太のW主人公で話が進みます。障害者、いじめ、両親の共働き、交通事故、親との死別、中学受験、町工場の倒産など、描かれているテーマは現在にも通じるものがあります。児童文学に分類される作品ですが、大人が読んでも読みごたえがあります。私の教育観にも大いに影響を与えていると思います。

実は、最初にこの作品と出会ったのは、書物ではなくて映画でした。学校推薦の映画ということで、さほど期待もせずに見に行ったところ、とても面白く、強烈な印象が残りました。「あいつもここに連れて来い、ニイマルゴ〜」というBGMも忘れることができないくらいです。

そのあと、原作本を学校の図書館で見つけて読みました。中学生か高校生の時、公営の図書館で同じ本を

見つけ、懐かしくなってまた読みました。その後、書店で偶然この作品が文庫版になっているのを見つけ、手元においておきたくなって購入しました。今でも折に触れては読み返します。

小中学生のころは、主人公やそのクラスメイトに感情移入して読んでいましたが、年齢を重ねるにつれ、そのときそのときでいろいろな登場人物の立場に立って読んでいくことに気が付きます。この頃は主人公の親や先生の視点に立っていることが多くなりました。

これからずっと、一生読み続けていき、そのたびに新しい発見があるのではないかと思います。

みなさんにも一生付き合えるような作品との素敵な出会いがありますように。

推薦図書

★「11からはじまる数学」

松田修、津山高専数学クラブ著（東京図書）
数学の面白さ、美しさに触れてほしいのはもちろんですが、高専生がこんなことをしてるんだ、ということを感じてほしいと思います。

★「中谷宇吉郎随筆集」

樋口敬二編（岩波文庫）
雪の結晶の研究で有名な中谷宇吉郎氏の随筆集です。研究のことから家族のことまで、内容は多岐にわたっています。気になった章や、読みたいところから読んでみてください。
文学としても楽しむことも、科学や研究に対する中谷氏の考え方を味わうこともできます。

読書と発想

一般科目（理科） 本田 淳 史

本年4月から都城高専で数学を担当することになりました本田淳史と申します。私が読書に興味を持ち出したのは大学に入ってからですが、読書がなければ今の自分はないと思います。この記事では、私がどのようなして読書に興味を持ったのか、私が読書を通じて得たものなどを紹介したいと思います。私が読書に興味を持ったのは、大学・大学院時代の指導教官の影響です。指導教官はそれまでに会ってきた数学者とは全く異なるタイプで、知識の豊富さからくるユーモア、物事の本質を突くような鋭い洞察力を兼ね備えた、まさに切れ者といった方でした。一方で、先生は先駆的な研究で国際的な評価も高く、現在の微分幾何学を先導する研究者です。まさに先生は私のあこがれる数学者と言えます。

先生は、はっとさせられるような言葉をたくさん与えてくれました。その一つに「自分なりに頑張ろうなどと言っているうちは、自分の殻を破ることはできない」というものがあります。まさに目から鱗でした。それらの言葉はすべて先生自身が経験と知識から出てくるようなものであり、どのような経験をするとそのような発言が思い浮かぶのか不思議に思っていました。その疑問に対する答えを探っているうちに、読書と出会いました。

先生はよく市民図書館や本屋に行かれていたようで、研究室には小説から漫画まで多岐に渡るジャンルの本がいつもありました。とあるとき、先生は多忙そうにしながら、最近読書の時間もない、と気落ちしていたことがありました。私はその姿を見て、読書はそんなに楽しいのかと驚き、本を読んでもみようかと思うようになりました。まず私は評判の高かった東野圭吾の本を読みました。「分身」という本です。最初は学会などへの移動時間に少しずつ読み進める予定だったのですが、物語が進むにつれ止まらなくなり、結局一日で読み終えてしまいました。この本を皮切りに「変身」、「宿命」、「眠りの森」など、東野圭吾の本にはまってしまいました。それからは小説、主に数学者の伝記、歴史書など幅広く読書するようになりました。

現代では、テレビやインターネットの情報媒体によ

り実際の現象を直に見聞きすることができますが、読書はそれらに比べ情報量は劣ります。しかし、本を読むとその舞台で何が起こっているかを読者自身が想像するため、自分の頭で考える能力が養われるのは明白です。私の専門に扱う研究分野は100年以上の歴史のある古典的な対象を扱います。したがって、現代に発見したことは過去の数学者により既に発見されていたなどということはよくあります。誰も思いつかなかった発想こそが最も必要とされるわけです。読書はそのような力を鍛える上で最適なツールかもしれません。指導教官の独自の考えも読書を通じた発想力がもたれていると思います。みなさんも読書を通して想像力を鍛え、自分らしいアイデアを打ち出してみませんか。

推薦図書

★分身

東野圭吾（集英社文庫）

文中でも紹介しましたが、私が読書にはまったきっかけとなる作品です。読んでみると一見、よくあるドッペルゲンガーの話かと思いますが、最後に思わぬ結末が待っています。著者は工学部出身ということもあり、理系専攻の方にはより楽しめる作品かと思います。

★ガロア——天才数学者の生涯

加藤文元（中公新書）

ガロアは最も有名な数学者の一人です。彼は享年20歳ととても短い生涯ですが、数学史に名の残るほどの有名な定理・理論を残しています。この本の著者は私の知り合いの熊本大学理学部の教授の方です。この本は実際にガロアが生まれ育ったフランスへ著者が行き、ガロアが命を落とした決闘の場所などに訪れて記したものです。

本の贈り物

一般科目（文科） 福田 佳奈子

4月より一般科目文科に着任致しました福田佳奈子です。私は英語を担当していますので、本と英語をキーワードに、私の思い出をお話したいと思います。

みなさんは、子どもの頃、お誕生日やクリスマスに何が欲しいか聞かれた時、なんと答えていましたか？私は、よく「図書券」と答えていました。今では図書カードの販売しかされていないそうですが、私が小さい頃は、1枚500円のお札のような図書券が売られていました。小学生の私は、その絵柄の虜でした。赤やピンク色の十二単を着た黒髪の女性が巻物を読んでいる絵で、背景には桜、そして所々に光沢のある銀色の模様があしらわれている、大変美しいものでした。私は、せっかくもらっても、すぐには使わず、宝物のように集めていました。そして、中学生になり、英語の授業が大好きになった私は、ジュニア版の英和辞書には、調べたい単語が載っていないことがあるのに気が付き、もっと“大人の”英和辞書を買いたいと思いました。そして、集めていたあの図書券で買いたいと思いました。この時に買った辞書は大学の受験勉強まで使いました。美しい券が辞書に姿を変えて、ずっと私の手元にありました。その辞書はもうぼろぼろになっていますが、思い出が強く、今でも私の本棚の主要メンバーとなっています。

話は変わりますが、私にはアメリカのフィラデルフィアに住んでいる大親友がいます。彼女が外国語指導助手として宮崎で働いている時に出会いました。私たちには共通点がありました。それはハルキストだったことです。この言葉、知っていますか？村上春樹の小説のファンのことです。私の本棚には日本語の、彼女の本棚には英語の村上春樹が大切に並べてありました。私たちはよく、日本語と英語で書かれた同じ作品について感想や考えを言い合いました。お互いの言語の勉強の材料にもしました。言語や文化が違って、一つの小説の世界に一時的に共存できる楽しさ、それぞれにそれぞれの解釈がある驚きを感じたものです。仲良くなって3年が経ち、ついに彼女が任期を終え、日本を離れる日が来ました。悲しくて堪らなかったその前夜、急に彼女が私の家に大きな段ボールを抱えて来ました。彼女は言いました。「お別れの手紙を書こ

うと思ったけど、やっぱり言葉にならなかった。これだったら、手紙何百通分もの想いを通い合わせることができるよね。」箱には、村上春樹のペーパーバックがぎっしりと入っていました。私は彼女がその本を大切にしていたのを知っていたので、涙と感謝の気持ちが溢れました。

私は本を通して、知る喜び、心に栄養を与える大切さ、他者との共感を学びました。様々な種類の本を旅してみてください。高専の学生のみなさんなら他言語の本の世界にも立ち寄る機会があることでしょう。みなさんが、本からたくさんの贈り物をもって、心や教養が豊かになっていくことを願っています。

推薦図書

★世界の英語を歩く

本名信行（集英社新書）

英語は今、世界でどのように使われているのか。私たちノンネイティブの英語との新しい付き合い方について書いてあります。

★走ることに語るときに僕の語ること

村上春樹（文春文庫）

作家・村上春樹は日々トレーニングを積み、マラソンやトライアスロンに出場しているそうです。この本は「走る」という行為を媒介にして、自分自身を語った内容です。走ることで日々の暮らしを送ること。共通点が見つかる本です。



私の読書体験

技術支援センター 安友政登

本年度4月より技術職員として勤務することになりました安友政登（やすともまさと）と申します。主に物質工学科の実験授業を支援しています。今回、図書だよりに掲載図書紹介を含めた読書に関して執筆する機会をいただきました。私は普段あまり読書をするほうではなく、執筆の依頼を受けた際、改めて日々の読書の重要性を痛感しております。私の浅い読書経験ではありますが、少しばかり述べさせていただきます。

私のこれまでの読書について振り返ってみると、学校の授業等に関係なく純粋に興味を持った本を読むようになったのは大学に入ってからだったと思います。当時は伝記や推理小説、評論（エッセイ）などを好んで読んでおりました。

皆さんは“思考の整理学”という本をご存知でしょうか。私が出会った本の中で最も印象深かった本の1つです。この本はより良いアイデアを生み出すための効果的な思考過程や行動を筆者の経験を交えて書かれたものです。

この本の冒頭には「グライダー人間」と呼ばれる人が登場します。これは、先生、授業や本などにひっぱられて（受け身的に）勉強することに長けているが、自ら考えようとしなない人のことを指した例えです。筆者はこの例えを基に、自ら考える（アイデアを出す）重要性和その方法を説いていますが、私はこの一節を読んだときの、なんとも言えない恥ずかしい気持ちを今でもよく覚えています。それは当時私の勉強方法そのものだったからです。能動的な勉強に見えても、実際は受け身的な知識の吸収で満足し、頭を使っているようで全く使っていないことを見透かされたような感じがしました。私はこの本の読了後は、授業中や教科書、専門書に記述されていることを基に、どんなに浅い考えでも、間違っているとも考察するよう心がけるようになりました。

一つの本に関して私の経験を述べましたが、このように他人である著者の意見を、文字を通して聴くことができるのは本の大きな魅力の一つではないでしょうか。

本校には図書館というすばらしい施設があります。ぜひ図書館を利用して、本から発する多様な意見、主

張を聴いてほしいと思います。そして、先ほど例に挙げたように受動的に本から知識を吸収するだけでなく、少しでも多く考える作業が加われば、より良い読書になるのではないかと思います。

推薦図書

★思考の整理学

外山滋比古（筑摩書房）

良いアイデアは一時“寝かせる”こと、アイデアを随時メモに書き込むこと、メモの取り方（メタ・ノート）などアイデアの整理方法が記述されています。なるほどと思う筆者の経験談が多数書かれています。

★R.P.G

宮部みゆき（集英社文庫）

推理小説独特の引き込まれる文体で書かれていて読みやすい本です。最後の部分で、これまで予想していたことが見事に裏切られます。読み終えたあと、題名の意味（ロール・プレイング・ゲーム）がよくわかると思います。

★赤い指

東野圭吾（講談社文庫）

推理小説で有名な著者ですが、他の著書とは異なる雰囲気があります。登場人物の老婆の指に塗られた口紅（赤い指）がポイントになっています。現代の社会問題を少し考えさせられる内容です。



教員交流を終えて～鹿児島高専での一年間～

機械工学科 高橋 明 宏

昨年の平成24年度、「高専・両技科大間教員交流制度」により鹿児島工業高等専門学校機械工学科に配置替えとなりました（学外への交流教員の第一号です）。紙面をお借りしまして、鹿児島高専の赤坂校長、機械工学科南金山教授に心より御礼申し上げます。この制度のメリットは、他高専の方々と交流できることです。このような貴重な機会を与えていただきました、前校長の三村先生、本校教職員の皆様に深く感謝申し上げます。僭越ですが、昨年度の写真を並べてみました。どうぞご覧下さい。（担任でしたので三年機械の写真が中心です）

以上

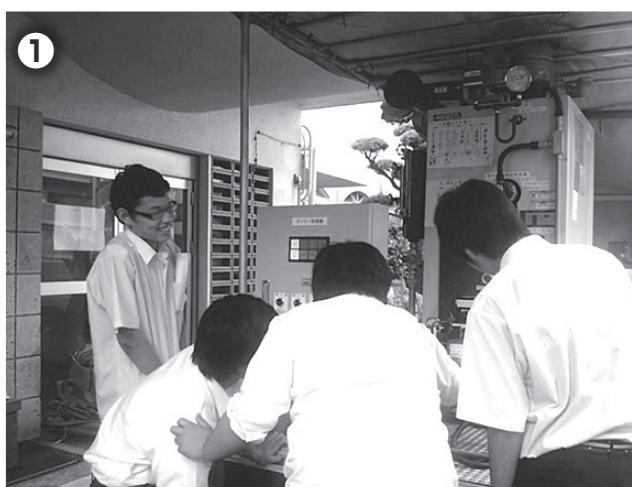


写真1：二級ボイラー技士講習会で行った鋳鉄ボイラー実技の様子です（6月）。資格取得に熱心です。
写真2：元トヨタ車体研究所社長の宮村氏による三年機械対象の「やる気になるための自分スイッチ」講演の様子（7月）。宮村氏は鹿児島高専の一期生です。
写真3：鹿児島高専文化祭（11月）の手羽先屋（クラス屋台）です。お客様が大勢いました。
写真4：体育祭（11月）での3年機械の学生です。一日中この格好です。
写真5：体育祭（11月）に飾られる「やぐら絵」の取り付け場面です。先輩が後輩を熱血指導する伝統がありました。

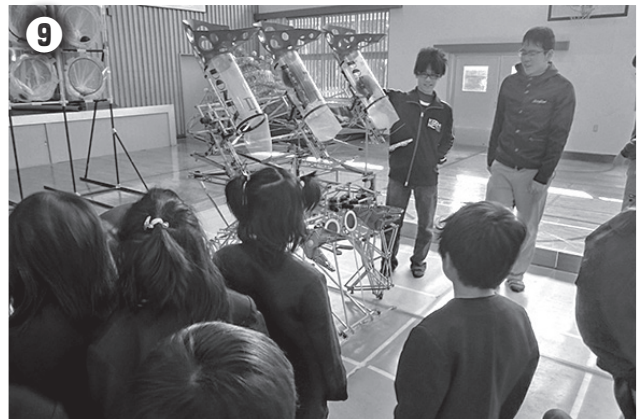


写真6：タイで行われた国際シンポジウムの様子です（11月）。国際交流活動が盛んでした。

写真7：クラスマッチの写真です。ユニホームをそろえ、団結を高める様子は都城高専と同じです。

写真8：担当した卒研生が赤坂校長から表彰状を頂いている場面（1月）。（この学生は24年度高専機構学生表彰を受賞）

写真9：園児にロボットの説明をしている3年機械の学生（2月）。地域への公開講座や理科教育が活発です。

写真10：3Mクラス送別会の写真（3月）。皆、それぞれの夢に向かって努力してもらいたい。



新入生オリエンテーション開催される

5月から6月にかけて、図書館では1年担任のご協力を得て特活の時間を使って、「新入生オリエンテーション」を開催しました。

図書館ではこの「新入生図書館オリエンテーション」を非常に重要な行事と位置づけています。都城高専図書館の存在は、5年間の学生生活において非常に大きな地位を占めています。図書館を学生諸君が有効に活用するか否かは、今後の学生生活の質を規定するといっても、決して過言ではありません。

このことは、^ひ延いては就職後の社会生活を規定することにもつながります。そして、「新入生図書館オリエンテーション」は、本校における学生生活をスタートさせたばかりの1年生を図書館へと向かわせる動機づけの役目を負っているのです。

図書館スタッフの自己紹介の後、図書館長（望月）が学生生活における読書の意義、及び図書館利用の重要性について講話を行いました。講話の趣旨は一言をもって^{おお}蓋うと、“人が良質な書物に触れて感動するという^く単純な事実を「情報」という言葉によって規定す

ることはできない。人が良質な書物に触れて感動するということは、他の何ものにも変え難い、それ自体固有の出来事である”というに尽きます。

次に図書係から配布した資料に基づいて、開館日時、貸出・返却の手順、蔵書検索・所蔵MAPなど、図書館利用のノウハウについて説明がなされました。なお、図書館の蔵書検索はパソコンによって行いますが、1年生が図書館を自由に探訪する時間を多く確保するという配慮から、スクリーンを使つての実地指導は、後期に実施します。また、1年生には昨年3月に刊行された冊子「3年生までに読んでおきたい推薦図書」が、今後の読書の「羅針盤」として贈られました。なお、図書館では「新入生図書館オリエンテーション」の機会に、1年生に「体験貸出」を行っています。事実、1年生の中には図書館の本を今日初めて借りた人も多いはずです。そして、今日のこの^く一歩は誠に細やかな一歩にすぎませんが、それが都城高専図書館という鬱蒼たる書籍群に分け入った確かな一歩であることを、私は信じたいと思います。（文責・望月）



平成25年度学生図書委員

図書委員長：榎 田 宗 丈（4学年・電気情報工学科）
 図書副委員長：山 中 康 成（4学年・機械工学科）



学年 \ 学科	機械工学科	電子情報工学科	物質工学科	建築学科
1 学年	酒井 乾至	谷口 莉菜	仲澤 侑花	西江 剛
2 学年	清武 大晃	宮崎愛美麗	川野 正博	田尻 伊吹
3 学年	郡 勇人	仲澤 知剛	花田 隆文	薬師寺孝輔
4 学年	山中 康成	榎田 宗丈	岩切 聡志	小妻 遥香
5 学年	坂元 宏亘	平田 ゆか	宮川 麻有	久徳 晃丈

図書委員長と副委員長の抱負

委員長 4E 榎 田 宗 丈

私は本を読むことが好きです。小学校、中学校時代は『ハリーポッター』などのファンタジーものをよく読んでいました。高専に入ってからあまり読まなくなっていたのですが、昨年の冬に図書館で1冊の本を手に取りました。それは人の心理や人間関係、他愛、自愛について書かれた本で、人間の心理にあるものは何なのか、人とのつながりはどういうものなのかということを書いていました。私の人生はその本と出会ってから、変わったのです。自分自身がどういう人間なのかを知ることができました。次第に「自分はこういう考えを持っているけれど、他の人はどういう考えを持っているのだろうか？」という考えを持つようになり、思想に関する本を多く読むようになりました。読

んで、感じた本の数だけ、自分以外の人間のことにについても考えることができるようになりました。そして、本の持つ力をより感じ、もっといろいろなことを知りたいと思い、以前より多くの本に触れるようになりました。

我々は普段からもっと多くの本に触れるべきではないでしょうか。何もせずに知識を得ることはできないし、自分の思想を深めることはできません。本はそれぞれの専門家が書いたものであり、著者から読者へのメッセージです。手を伸ばせばそこには豊富な知識と新しい出会いが待っているのです。私は図書委員長として、みなさんがもっと多くの本に触れられるよう、できる限りのことをしていきます。

どうか宜しくお願いします。

副委員長 4M 山 中 康 成

今年度、図書副委員長として、図書館と学生の皆さんとの距離をより近いものとするべく働くこととなりました。就任にあたり、私がやりたいと思っていることは、図書館には様々なジャンルの本が置いてあるということをもっと皆さんに認知してもらうということです。うちの図書館には、専門書や、小説等が多く

ありますが、その他にも趣味に関するものや、建築や美術等の大きな資料、雑学の本など、本当に沢山のジャンルの面白い本が埋まっています。そういった本の存在を多くの方に知ってもらえるよう頑張ります。

これから1年間、委員長の榎田君をしっかりと補佐していきたいと思っています。図書委員の皆さんには、頼りない副だとは思いますが1年宜しくお願いします。

平成25年度図書館カレンダー

○は休館日です

2013年(平成25年) 4月

日	月	火	水	木	金	土
	○1	2	3	4	5	6
○7	8	9	10	11	12	13
○14	15	16	17	18	19	20
○21	22	23	24	25	26	27
○28	○29	30				

5月

日	月	火	水	木	金	土
			○1	2	○3	○4
○5	○6	7	8	9	10	11
○12	13	14	15	16	17	○18
○19	20	21	22	23	24	25
○26	27	28	29	30	31	

6月

日	月	火	水	木	金	土
						1
○2	○3	4	5	6	7	○8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
○23	○30	24	25	26	27	28
						29

7月

日	月	火	水	木	金	土
	○1	2	3	4	5	6
○7	8	9	10	11	12	13
○14	○15	16	17	18	19	20
○21	22	23	24	25	26	27
○28	29	○30	31			

8月

日	月	火	水	木	金	土
				○1	2	3
○4	5	6	7	8	9	10
○11	○12	○13	○14	○15	○16	17
○18	19	20	21	22	23	24
○25	26	27	28	29	○30	31

9月

日	月	火	水	木	金	土
○1	2	3	4	5	6	7
○8	○9	10	11	12	13	14
15	○16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	○28
○29	30					

10月

日	月	火	水	木	金	土
		○1	2	3	4	5
○6	7	8	9	10	11	12
○13	○14	15	16	17	18	19
○20	21	22	23	24	25	26
○27	28	29	30	31		

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
○3	○4	○5	6	7	8	9
○10	11	12	13	14	15	16
○17	18	19	20	21	22	○23
○24	25	26	27	28	29	30

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
○8	○9	10	11	12	13	14
○15	16	17	18	19	20	21
○22	○23	24	25	26	27	○28
○29	○30	○31				

2014年(平成26年) 1月

日	月	火	水	木	金	土
			○1	○2	○3	○4
○5	6	7	8	9	10	11
○12	○13	14	15	16	○17	○18
○19	20	21	22	23	24	25
○26	27	28	29	30	31	

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
○2	○3	4	5	6	7	8
○9	10	○11	12	13	○14	○15
○16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

3月

日	月	火	水	木	金	土
						1
○2	○3	4	5	6	7	○8
○9	10	11	12	13	14	○15
○16	17	18	19	20	○21	○22
○23	○30	○24	○31	25	26	27
				28	29	○29

図書館からのお知らせ

夏季休業期間中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を、夏季休業期間中は特別に長期貸出としますので、ご利用ください。

帯出冊数 7冊以内 / 貸出開始 7月8日(月) / 返却日 9月2日(月)

夏季休業期間中の開館について

夏季休業期間中の開館時間及び休館日は次のとおりです。

開館時間 平日 9時～20時(8月2日～31日は17時まで) / 土曜日 9時～17時

休館日 毎週日曜日、7月1日、15日、30日、8月1日、12日、13日、14日、15日、16日、30日



編/集/後/記

第73号の「図書館だより」には、4月に着任されました校長以下、5名の教職員に寄稿していただきました。なお、今回は学生と接することの多い技術支援職員の原稿も掲載しました。それぞれに読書の思い出や楽しみ方等を語っていただき、最後にお薦めの本を推薦いただきました。

皆さんも今回の寄稿文に刺激を受け、図書館の利用が増えることを期待しております。また、昨年度に教員交流をされた先生に、教員交流の体験談を寄稿していただきました。

夏季休業の長期貸出(7冊)も7月8日から始まりましたので、低学年生は特に読書感想文の課題に向けて、本を借りてください。

発行に際しご多忙の中、ご寄稿いただきました先生方に厚くお礼申し上げます。